

〔学術資料〕

坂東克彦弁護士特別講義・講義録  
「日本初の公害裁判・新潟水俣病訴訟を語る」

Special Lecture by Katsuhiko BANDO: A Lawyer's View  
on Japan's First Pollution Lawsuit —Niigata Minamata Disease

菅原 真・坂東 克彦  
Shin Sugawara, Katsuhiko Bando

I. 解説（菅原 真）

II. 特別講義「現代人権論」（坂東 克彦）

1. 新潟水俣病にかかわるまで —公安条例事件・砂川事件・三井三池闘争のこと—
2. 新潟水俣病事件を初めて知った頃のこと
3. 新潟水俣病事件の前に熊本で起きていたこと —「見舞金契約」—
4. 熊本水俣病第一次訴訟 —熊本チッソ付属病院長・細川一先生のこと—
5. 患者発生後の加害企業チッソと昭和電工によるアセトアルデヒドの生産拡大
6. 日本で最初の公害裁判「新潟水俣病第一次訴訟」提訴までの苦難の道のり
7. 被告側証人・横浜国立大学北川徹三教授の「農薬説」を法廷で論破
8. 新潟水俣病第一次訴訟判決の意義とその後の直接交渉
9. 新潟水俣病第二次訴訟弁護団長辞任以降 —新潟県水俣病地域福祉推進条例の制定—
10. 最後に —名古屋市立大学の皆さんに贈る言葉—

I. 解説（菅原 真）

本稿は、2011年12月15日（木）の4限目に名古屋市立大学滝子キャンパス 1 号館201教室で行われた人文社会学部「現代人権論」の特別講義の記録である。この特別講義のために招聘したゲスト講師の坂東克彦弁護士は、新潟水俣病第一次訴訟原告弁護団幹事長、第二次訴訟原告弁護団長を歴任され、文字通り「日本初の公害訴訟」の中心人物であり、現在もなお、「二度繰り返した過ちを、三度繰り返してはならない」との思いから、裁判資料の整理と講演活動に力を注いでお

---

1. 「新潟水俣病第五部 次世代へ（2）裁判資料を整理、寄贈」『読売新聞』新潟版2012年 8 月31日付。  
[http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/niigata/feature/niigata1346860077306\\_02/news/20120906-OYT8T00067.htm](http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/niigata/feature/niigata1346860077306_02/news/20120906-OYT8T00067.htm)

られる<sup>1</sup>。

坂東弁護士は、1933年2月12日に新潟県小千谷市でお生まれになり、中央大学法学部を卒業後、1959年に弁護士登録をされ、1963年に新潟市に坂東克彦法律事務所を開設され、その後、新潟水俣病と熊本水俣病の両裁判において、極めて重要な役割を果たされた。本講義では、新潟水俣病との出会い、新潟水俣病第一次訴訟の提起から判決、その後の直接交渉、第二次訴訟から現在の水俣病をめぐる状況まで、公害裁判を切り開いてきた先駆者ならではのお話が盛り込まれ、大変貴重な特別講義となった。

坂東弁護士には、単著『新潟水俣病の30年—ある弁護士の回想』（NHK出版、2000年）をはじめ、多くの共著書や論文がある。しかし、日本の公害事件において公害被害者が法的に救済されるための一里塚となった新潟水俣病第一次訴訟原告弁護団の「準備書面」こそ、最も重要な作品である。日本の法律家・法曹であれば誰もが読んでいる雑誌の一つ『法律時報』において、当時巻頭言を担当していた戒能通孝教授は、「水俣病についてこの準備書面ほど簡潔かつ明快な、それでいて学問的厳密性を維持した論文は、ただの一つとして書かれていない。しかもその執筆者が、医学者でも化学者でもなく、弁護士であるということのなかに、日本の法律学の偉大な名誉があると確信する」と述べ、「法律家全体の名誉」、「記念碑」と絶賛していた<sup>2</sup>。

公害裁判や薬害裁判という今日では当たり前の出来事も、坂東弁護士をはじめこの問題に文字通り全精力を傾けた先人たちの先駆的活動がなければ、被害者たちは惨めな状態に置かれたままであっただろう。明治時代も現在も、基本的に同じ内容の民法709条（不法行為の規定）が存在していたにもかかわらず、「公害の原点」である戦前の足尾鉍毒事件では、公害被害を民事裁判に訴えて法的解決を求めるなどということはおよそ考えられないことであり、周知のように、田中正造は明治天皇への直訴という手段を用い、狂人扱いされた。当時の公害（鉍害）被害者は、「永久示談契約」「見舞金契約」等に基づきはした金を受け取るにより、因果関係がほとんど明白な健康被害・財産被害に対してさえ泣き寝入りを強いられた。当時の通説的見解は、「鉍害は他人の財産その他に加へられた損害であるが、かゝる損害は鉍業権者が自己の権利圏内に於ける権利行使に際して相隣者に加へたものである。（…）かく鉍害は権利行使に際して発生する損害であって、普通の不法行為の場合の如く権利行使に無関係に発生したもの、又は損害の発生を目的としてなされたものではないのみならず、鉍害の場合に於ける権利行使は鉍業という国民経済上重要な生産行為に属する点よりして、（…）鉍害は一般に無過失行為上又は適法行為上の損害であると考えられ、不法行為上の損害とは解されてゐない」というものであった（坂東弁護士が新潟水俣裁判の際に、東京の古書店で偶然発見したという平田慶吉博士の『鉍害賠償責任論』（日本評論社、1932年）49頁）。すなわち、国策としての鉍工業振興政策に起因して生じた住民の被害は、受忍限度の範囲内のものとされ、民法上の不法行為を構成しないと理解されていたので

2. 戒能通孝『法律時報1951-1973』（慈学社、2008年）733-734頁。

ある。

これに対して、坂東弁護士が本講義で語ったように、新潟水俣病第一次訴訟新潟地裁判決は、「工場排水等を最高技術の設備をもってしてもなお人の生命身体に危害が及ぶ恐れがある場合は、企業の操業短縮はもちろん、操業停止までが要請されることもある」と昭和電工の責任を認め、「有害物質が法令による取締制限内であったとしても、民事上の責任が左右されるものではない」と判示した<sup>3</sup>。日本国憲法下においては、国策に基づく企業活動といえども、それによって人の生命・健康権は侵害されてはならないことを明確にした判決であると理解し得る。足尾鉍毒事件と同様の決着が図られ、被害者が裁判提訴を行う上での足かせとなっていた熊本の「見舞金契約」について言えば、熊本水俣病第一次訴訟判決は、同契約が民法90条の公序良俗に反する違法な契約であると認定した<sup>4</sup>。

しかし、その後の水俣病未認定患者の「救済」をめぐり、政府与党案による「政治決着」が1997年に行われた。はした金と引き換えに裁判を終了させる現代版「見舞金契約」であった。被害者は水俣病患者と認定されたわけではなく、「加害」企業は「原因」企業にすり替えられた。この「救済」案を最後まで受け入れなかった未認定患者が最後まで訴訟を継続していたのが熊本水俣病関西訴訟である。最高裁は、旧水質二法に基づき、国と県が被害の拡大を防がなかったのは著しく合理性を欠き違法であるとし、原告を水俣病患者と認定し、国と県の損害賠償についても認容した<sup>5</sup>。

しかし、被告である国は、被害者たちの願いにもかかわらず、この最高裁判決後も水俣病認定基準を改正することを拒否し続けている。政府が1977年に改定した「昭和52年判断基準」は、たとえ疫学条件が充たされていても、複数の症状がなければ水俣病患者とは認定しないという厳しい条件に変更したものであるが、この認定基準を基本的には変えていない。しかし、新潟県では、県知事主導の下、坂東弁護士をはじめとする新潟病問題に係る懇談会を設置し、同懇談会の提言を内容とする「新潟水俣病地域福祉条例」を2008年9月に全会一致で可決し、2009年4月から施行した。ここでは、最高裁判決同様、疫学条件を充たし水俣病の症状を有する者を「新潟水俣病患者」としている<sup>6</sup>。

国は2012年7月末日、水俣病被害者救済特別措置法に基づく新たな「救済」申請を締め切った。この「救済」自体も補償金額を含め問題点を多数含むものであったが、国は未「救済」の水俣病患者が数万人単位で存在していることを認識しながら、申請を締め切ったのである。

私たちは、3・11フクシマ原発事故を体験した。いったいこの国では水俣病事件から何を教訓

3. 新潟地裁1971年9月29日判決・判時642号96頁。

4. 熊本地裁1973年3月20日判決・判時696号15頁。

5. 最高裁2004年10月15日第二小法廷判決・民集58巻7号1802頁。

6. 拙稿「経済活動の自由」辻村みよ子編『基本憲法』(悠々社、2009年) 163～165頁。

7. 拙稿「新潟水俣病事件からみた福島原発事件(1)～(5・完)」環境と正義149号～154号(2012年)。

として学んだのか<sup>7</sup>。政財界や学者の責任を含め、私たちは坂東弁護士の特別講義における一言ひとことを噛みしめる必要があるであろう。

本特別講義をお引き受けいただいた坂東克彦弁護士、そして千代夫人に、あらためて心からの御礼を申し上げる次第である。

## Ⅱ. 特別講義「現代人権論」(坂東 克彦)

本日は、お招きいただき誠にありがとうございました。私が水俣病事件と関わるようになったのは、昭和40年のことでした。昭和40年、私は昭和8年生まれですから34歳の時、この水俣病事件に出会うことになりました。それから今日まで約40年以上いろんなことがありました。今日なお水俣病事件と関わり続けております。山あり川あり、その度にそれを乗り越えてきたことが、今日（こんにち）ある理由であろうと思います。今回は家内にも一緒に来てもらいましたが、水俣病事件に関わった当初は、それからしばらくの間どうすればこの裁判に勝つことができるか、寝ても覚めてもそのことだけを考えて、邁進し続けてきたわけです。

### 1. 新潟水俣病にかかわるまで 一公安条例事件・砂川事件・三井三池闘争のこと一

私が弁護士になったのは昭和34年でした、その春、司法研修生用の宿舎のある横浜に参りました。弁護士になって東京の事務所に入りました。戦後の時代からまさに日本は激動の時代を迎えようとしていました。

戦後の復興を果たし、〔昭和〕30年代に入りますと、日本は高度経済成長の時代に突入し、私が弁護士になったすぐに、私が担当した事件のひとつは東京都公安条例事件です。京都市公安条例で、新潟県公安条例で、集会結社について行政の許可が必要だ、そのことに対する裁判がありました。弁護士になりたての頃、学生諸君がデモをやって警官とぶつかりあう。何人もが起訴される事件を、私も東京に行ったときに体験しました。東京地裁の裁判長は岸盛一さん。東京地裁の裁判官、岸裁判官は、東京都公安条例をはじめとする公安条例は、憲法違反で無効であるという判決をだし、そしてそれに対して、東京地方検察庁は飛越上告で、最高裁にいきなりこの事件をもっていき、憲法に合致すると、ひっくり返されるわけです。その上告審の裁判、最高裁の長官は田中耕太郎さん。この方が裁判長だったのですが、私が弁護団の一員として大法廷で憲法違反の弁護をしました。

それが終わって、東京ではやがて安保闘争の時代を迎え、この時に東京地裁の伊達秋雄裁判官は、砂川事件について安保条約は憲法違反という判決を出し、それに対して、今度はまた検察庁がまた最高裁に飛越上告して、そして最高裁は憲法違反の判決を覆しました。これまた私も弁護団の一員として参加しました。

その後、これまたひとつ運命を決める一大事件に関わることになりました。〔昭和〕35年4月26日、皆さん分かっていないはずですが、九州・福岡県の大牟田というところ、三井炭鉱が、日本の生産、良質な炭鉱を産出しておりました。そこでその三井炭鉱の労働者1,200名を、活動家と呼ばれる人達を指名して、三井炭鉱山が解雇する事件がありました。その闘争をめぐって、「総資本対総労働」という大きな労働争議があったわけですが、弁護士2年目ながら、私は総評弁護団の一員として、大牟田に中に入り、戦いの中に、機動隊にもみむくちゃんにされながらも、労働者の権利を守り続けるため、体を張って戦い続けて参りました。このとき、石田博栄という労働大臣がおりまして、石田博栄さんが、炭鉱の中に入って、そして炭鉱使用者側と労働使用者側、中央労働委員会に斡旋する手続きをとり、勝利を信じた三井三池炭鉱労働組合は期待を完全に裏切られて、中央労働委員会は全1,804名の労働者の首切りを認めてしまったのです。その決定が出たとき、私は大牟田におりました。この大牟田におった時の炭鉱労働者の落胆ぶり。この争議は完全な労働者側の敗北に終わったわけであります。まだ4月の段階で、大牟田はまだ肌寒いですよ。そしてそこでは、炭鉱の中に入ろうとしても、中に入れないように会社側がバリケードしてるんですよ。そこでピケを張ったりしていますけど、この寒さをしのぐために火を燃やしてあたってらんですよ。労働者たちが。「先生、わしは炭をやりたくてね～」と。私は、これが労働者のあるべき姿、この人たちのためにやっていくことは間違いないと思いました。そして、まもなく東京に帰った段階で、今度は若い弁護士が地方に散ろうという話が展開しまして、私は〔昭和〕38年の夏の暑いときに郷里の新潟に戻って参りました。

## 2. 新潟水俣病事件を初めて知った頃のこと

昭和40年6月12日、新潟水俣病事件公表。この前の〔昭和〕39年の6月16日、新潟地震がありました。私は、水俣病事件公表といっても、その時は水俣病とは何なのかも全く分らなかったんです。東京に時間があって来た時に、私が仕事をしていた東京中央法律事務所のキャップから「水俣病事件ってなんだよ」、こう聞かれてもわからない。その時期は、公害という言葉もほとんどなかった時代です。使われてもいなかった。そして、実はその前に、〔昭和〕31年5月1日に熊本の水俣事件が公表されたわけです。新潟より9年早く、実は今も問題になっております水俣病事件が、新潟の9年前に公表されておった。

私は、新潟でその水俣が起きていると聞き、その時はほとんど記憶のないままであったんですが、その水俣病の被害者を応援している人から、一体どこで誰がどう動いているのかを聞いて、そして、現地に入ったのが昭和40年の秋、阿賀野川の下流流域の左岸です。右岸・左岸は、上のほうから見て右側を右岸、左側を左岸といいます。左岸に江口という集落があって、そこに今日患者が集まるということで、出掛けて行ったのが最初の患者との触れ合いでした。秋に稲刈りが終わって、稲が干してある、あの匂いがね。非常に今でも懐かしい思いがしますが。そうい

う静かな雰囲気のア賀野川の左岸の集落に、非常にみんなが真面目な顔をして、その時は新潟で一生懸命患者さんの世話をしていた斉藤恒先生というお医者さんがあって、患者に水俣病の説明をしておりました。

世の中には水俣病の本などほとんど一冊もなかったと思いますね、当時は。ただ、岩波新書に宮本憲一先生とか、宇井純さんとか、庄司光先生とか、そういう先生方が日本の公害とか汚染的公害という言葉や、岩波新書で公害という言葉を使ってですね、出ておりました。そしてアメリカのレイチェル・カーソンの『沈黙の春（サイレント・スプリング）』。これは、水銀農薬を使うことによって虫が死に、やがて荒廃していくという、そういうことを描いた本であります。環境に関心のある方は、必ずこのレイチェル・カーソンの『サイレント・スプリング』、これを読むといいんだと言われ、私も読ませてもらった。それから、この新潟で水俣病事件が起きたということは非常に大きな事件として公表されて参ります。

### 3. 新潟水俣病事件の前に熊本で起きていたこと ―「見舞金契約」―

実はこの9年前に、さっき言いました〔昭和〕31年5月1日に熊本水俣病事件が公表され、そして患者たちは全く世論の支持のないままに、〔昭和〕34年12月30日、先ほど皆さんにお配りした〔資料の〕契約書をご覧ください。すさまじい契約書です、これは。

実は、私の事務所にはこういう資料を含めて、水俣病、イタイタイ病、四日市病、その他の日本の公害に関する、さまざまな資料がありました。その資料を、現在は新潟県に全て寄贈をして、ふれあい館というところで収納しているわけですね。先般、調べておったらこの契約書が出てきたんです。

今までは活字で印刷されたものしか見ていなかったけれど、この印刷物を早速ご覧になってください。ちゃんと指摘しますと、「契約書」というのがあってしょう。訂正がまず問題です。この「契約書」について、チッソたるものが作成日を〔昭和〕35年と書き間違えたんです。この訂正印が、ズタズタなんです。この訂正箇所、指示しましたところ。こういう形であったということ。

当時、熊本の患者さんたちは、水俣病患者家庭互助会という団体をつくっていて、皆一緒になって行動しておったのですが、その患者家庭互会とチッソの契約だと思っていたらそうじゃなくて、これは互助会の当時の役員個人の名前になっております。

そして、これを見ますと、第1条の（1）というところを見てくれますか。正式の手続きをした者、死亡した者、弔意金30万円及び葬祭料2万円と書いてある。チッソ水俣工場によって汚染された魚を食べて、水俣病を発病して死亡した人間に対して、たったの30万円だけりをつけておくんですよ。こういうのを見舞金と言うんです。そして、将来水俣病の原因が工場排水だと分かっても、これ以上の保証はないと、次に書いてあるじゃないですか。それからさらに原因がチッソ



の排水でないことが分かったらこの契約はそれで終わりだと。読んでみてください。

後に私は、この熊本の事件にも関わるようになったんです。

#### 4. 熊本水俣病第一次訴訟 ー熊本チッソ付属病院長・細川一先生のことー

水俣病の原因が何であるかを疑問に思った水俣のチッソ付属病院の細川一先生が、病院内の実験室で猫を使用し、そして様々な物質を猫に投与して水俣病の症状を呈するかどうかということ、を、病院ですっと観察しておったんです。34年の10月に、ナンバー400号の猫、つまりチッソ付属病院で実験で殺された猫が、私はチッソの弁護士から猫ジャッジをもらってきましたが、800何十匹の猫が殺されていたんです。

そのうちの猫400号は、毎日20ccずつの排水、アセドアルデヒド（…）。本当は皆さんに説明しないといかんと思うんだけど、アセドアルデヒドっていうのは高度経済成長を育てた物質、皆さんの身の回りにある、昔は例えば自然の材木とかですね、絹とか、綿とか、そういう製品で作られていたもの、全部それが、石油製品に、石油を加工して作られるものなんですよ。そのアセドアルデヒドの排水を猫に投与しておったら、まさに猫400号が水俣病症状を起こした。そして、34年の11月9日、この日にチッソの工場の社内の会議があった。そしてその時に、この細川一先生が、実は排水で実験していた猫400号が狂ったということを工場側に報告している記録があったんです。

作家の石牟礼道子さんから私のところに葉書がきて、「細川先生のもとにはこの猫400号の実験をした際のノート先生がお持ちだ。是非四国の細川先生の自宅に行って実験のノートがあるかどうかということと、その中身がどうなっているかを見てくれ」という依頼がありました。といいますのも、私、新潟で裁判をやっているその最中に、既に水俣病やそれを支援している人達から、私のところへ手紙が来て、九州でもいよいよ裁判を提起したらという気運が盛り上がってきた。どうしたらいいかという葉書が来て、それに対して私が、十何枚と回答して、手紙を出してやって以来、私と熊本の患者さん、その支援する人たちとの深い太いつながりがその時以来起こってきた。

それで昭和34年の11月9日、猫が狂ったということを報告して、さらに一例ではどうだからそれに実験を継続させてくれてといったものの、会社側がそれを拒否した。細川先生の猫実験はその後しばらくの間、続けられなくなってしまいました。しかし、まぎれもない事実、先程のこの32年の見舞金契約、その締結以前にチッソの会社がこの排水が原因だったということを知っていたという事実、これはもう確定的な事実になっていくわけです。

細川先生のお宅で「ノートの写真を撮らせてください」と言ったら、細川先生から「どうぞ」と言われたけれども、注記の部分で「会社の技術班の会議でこうやったというところは撮らないでください」と手で抑えられた。そして、抑えられて離された。皆さんならどうします？ 私は

それを見て、これこそ熊本水俣病の真実を表すひとつの重要な証拠だと考えました。今それを前にして、私はカメラを持っていました。シャッターを切るべきか切らざるべきか考えた。しかし、もし細川先生のお宅が火災で燃えてしまったら、熊本水俣病の本当の真実を表す地球でたった一つの証拠がここから消えてなくなってしまう。変なもんですね。そういうところへ行くと、そんなことを考えてしまうわけですよ。極めて冷静なんですよ。「何としてもそれならシャッターを切れ」と、別の坂東が坂東に命令するんですよ。そしてシャッターを切って、写真が撮れました。

細川先生はやがて肺癌になって、そして東京の癌センター病院に入院される。そしてそれが分かった後は、臨床尋問と言って、病床で細川先生を臨床尋問することになりました。私が、細川先生の尋問を担当いたしました。それに対して、細川先生はすらすらと真実を語っていただきました。この熊本水俣病事件に関しては、事件が起こった当初から、政府、あるいは化学企業がみんなして真相を明確にするのを妨害し、ついにこの見舞金契約を締結せざるを得ない状況に患者側が追い込まれ、誰がみたって不当なこの見舞金契約にハンコを押してしまった。そのことを、私も、そのことを新潟の水俣病事件に関わることによって知ることができました。

新潟で事件が起きた時も、まさにその通りなんです。偉い大臣だとか、厚生大臣だとか、皆来ますよ、そりゃあ。そして、新潟の地に入れば、皆いいことを言いますが、それが何の為に行われるのかということになると、新潟水俣病の真相をつぶすために来るんだということは、明明白白でした。それは、熊本の事件を知れば知るほどそうなるんです。

## 5. 患者発生後の加害企業チッソと昭和電工によるアセトアルデヒドの生産拡大

これを見てください。このグラフ。〔黒板に坂東弁護士作成のグラフが貼りつけられており、それを指さしながら〕私がこうやってお話しするときには必ず持ってくる。この私自身が書いたものです。裏はこのように継ぎはぎだらけです。しかし、これは私が乗り移っているグラフであります。

チッソが昭和8年からアセトアルデヒドの生産を始め、昭和電工は昭和10年からアセトアルデヒドの生産を始める。皆さん数字が出た時には、数字をグラフ化するという作法、やり方を、これをひとつ考えてほしいと思いますよ。宇井純さんの手法もそうでした。川でどういう魚がとれて、それは河口からどの程度のところか、グラフをつくるんです。そうするとその原因とか汚染の時期というものが、グラフを見ることによって分かってくるんです。これもひとつの思考の方法です。それを見習って、私はこういう風にグラフを書いてみました。

昭和31年の5月、水俣病事件公表です。それから、事件が公表していった、その時期から、昭和電工は、新潟県の鹿瀬工場にあったアセトアルデヒドの施設を近代的なプラントを増強して、生産を拡大していった。チッソはこの時期から、第七次、第八次と、アセトアルデヒドの製造施設を増設して、生産を拡大して参りました。



石灰石を電力で焼いて、カーバイドを作ります。カーバイドに水をかけると、ここにアセチレンガスが発生します。このアセチレンガスを、硫酸水銀の水溶液の中に引きこんでやります。ここで化学反応が起きて、アセトアルデヒドという物質が生まれます。アセトアルデヒド系はまさに玉手箱で、多数の炭素が結合して、多重結合を起こし、これを投与することによって様々な物質が、プラスチックだとか、ナイロンだとかそういうもの、タイヤの原料だとか、そういうものの中にも入っています。チッソがつくっていたのは可塑剤というもので、ほとんどのシェアを独占していました。

ビニールハウスやホースなんかでもですね、可塑剤を入れることによって折れない粘着力ができる。フィルムも折れないのはこれを使っているから、だから折れないで曲がる、それをチッソが独占しておったんです。その他にも、酢酸だとか多くの化学物質を引っ張っている、そういうものだったんですね。そして、このアセトアルデヒドをつくる際、反応を促進させるため、活性させるための触媒として、水銀を使ったわけです。この水銀が、アセトアルデヒドを合成するこのプラントの中で有機化する。塩化メチル水銀。これこそが、水俣病の原因物質であったわけです。先程言いましたが、このカーバイド産業というのは、近くに石灰岩の山がなくてははいけません。それからカーバイドを焼くためには、強力な電力が必要です。だから、チッソは熊本県と鹿児島県の間に発電所を作りました。昭和電工は阿賀野川流域にダムをたくさんつくって電力をつくり、安い労働力を結合して、ここでアセトアルデヒドの生産をしていた。その前には石灰岩を中心としたチッソ肥料をつくるのが主力だったんですが、やがて石油化学時代を迎えて、石灰岩の山も枯渇する、電力は造水器と活水器で、安定供給ができないわけです。そういう意味ではこのアセトアルデヒドの生産で国際競争に勝つためには、この原料を展開しなければいけないわけです。そこで、カーバイドから、今度は石油。そこから中間製品であるエチレンからアセトアルデヒドを生産する、そういう産業構造に変わっていったのです。

これが国の政策として、〔昭和〕30年代前半から、通産省を主導として、続けられていきました。ご覧のように、通産省の、この石油化学化計画が公表されたのは、昭和30年です。そして、この計画の内容は、三井三菱住友という旧財閥系を中心として、全国各地に石油コンビナートを建設するという計画であったわけです。その石油コンビナートのハード面の計画が完成し、その後、この石油コンビナートの地域に、アセトアルデヒドの生産工場をつくって参ります。それは石油が原料だから、恒常的にできるし、大量生産が可能なのです。

ちょっと〔グラフを〕見てみましょう。例えばの話が、これがチッソの生産量ですけれども、この40年近くになりますと、一気に徳山石油化学工場、ここに点線で書きましたけれども、そういう生産量が一気に高まり、昭和電工は昭和電工で、千葉にこのアセトアルデヒド工場をつくって参ります。30年の1月に事件が起これ、そして生産設備を増強して、チッソも昭和電工もアセトアルデヒドの大量生産に行くわけです。しかし、その間にこのアセトアルデヒドのプラント

から流れ出た廃液のなかには、塩化メチル水銀、これが入っていた。これを排除する施設を全くつくることなく、チッソは生産を3倍にも拡大し、もうどんどん拡大して、昭和電工も新しいプラントをまたつくって、生産を拡大しておったけれども、しかし日本の石油工業会によって、この原因がチッソの排水であるということは、既にはっきりと確定し、分かっていた。公表はされていなくても、分からないはずがないんですよ。分かっていたんですよ。

分かっているながらも、当時有機水銀を除去する方法がなかったということ、私は科学者から聞いている。だから、チッソがチッソ工場内にサーキュレーター、浄化槽を何千万もかけてつくった。つくってですよ、細かいことは抜きにして、〔昭和〕34年の12月にサーキュレーターの完成祝賀会を、チッソ社長の吉岡喜一は、福岡通産省の川瀬局長、水俣市の伊藤蓮雄さん、その他お偉いさんと呼んで、このサーキュレーターから出る水を汲んで、「チッソから出た排水はこのように澄んできれいですよっ」て飲んでみせる。そして場内は笑いが絶えなかった。そのチッソの書いた本の中にそれが書かれているんですよ。新潟の水俣病裁判の東京高裁で、私は、元熊本大学の教授に尋問しました。その先生は私の尋問に答えて、「私は、このサーキュレーターからの排水は処理されていました」と答えたけれども、反対尋問の前に、「坂東さん、この前の発言、間違えてました。訂正します」と。「チッソはこのサーキュレーターをつくりながらも、一回も排水をサーキュレーターに通さないで、そのまま海に流し続けていたんですよ」と言うんですよ。何と犯罪的なことじゃないか。「大の虫を生かすには、小の虫を殺すべし」。それが当時の政界や財界、チッソの考え方であったと私は思います。そして、新潟から昭和電工の重役がこのサーキュレーターの見学に参ります。「その時に、昭和電工からはどういう説明がありましたか」と、私は、反対尋問の時に質問しました。そしたら、「それは有機水銀をとるためのものではなくて、社会的紛争を処理するためのものだ」、つまり、漁民たちや水俣の人たちに向かっては、「これで毒はとったんだからもう心配するなと」いうことにしたんです。そしてその上に、まさに紛争解決の手段として、このお渡しした契約書が締結されていたんですよ。

## 6. 日本で最初の公害裁判「新潟水俣訴第一次訟」提訴までの苦難の道のり

私は、そういう事実を知れば知るほど、新潟水俣病もまた、熊本水俣病と同じく原因不明のまま処理されてしまうという危機感をひしひしと感じました。この事件の決着をつけるには、裁判で戦う以外にない、そう考えました。新潟の患者さんの中には、「与茂七（よもしち）話」と言って、大竹与茂七、刈谷田川の近くに洪水がでたときに、下流林を伐採したという罪に問われて引き回しにあい、そして殺されて処刑されたという、大竹与茂七というのがいまして、地元の人たちは義民として敬っておりましたが、話として、この与茂七が死ぬ時に「銭のないものはお上にたてつくな」と言って死んでいったということが、新潟の患者さんの中にいき渡っておりました。「裁判で決着をつけないといけない」と言っただけで、そういう考えが知れ渡っている当時の新潟

の地元民に裁判に出したらどうかと言っても、誰も話に乗ってこないんですよ。今じゃ「公害裁判」を簡単に考えすぎているんじゃないか。今はバツと裁判を提起するけれども、この裁判を提起をするまでに、二年かかりました。その二年の中で、患者さんのところへ行って、今日もまただめだ、また行ってまただめだ。阿賀野川の土手から、とうとうと流れる阿賀野川の川面を眺めながら、家に帰ってきたことも何度もありました。

しかし、政府の見解をみていっても、それは熊本と同じ、それを患者に訴え続けていったんですが、なかなかそうはいかん。そしたら、厚生省から県を通じて、一切合切の被害額を5,000万円で決着をつけないかと、秘密裏の働きかけがありました。それを私はアンテナを張っていたからわかりました。来たなーと。つまり、〔昭和〕34年の九州での20万円の見舞金で事件を決着させるというのは、新潟の場合は全部含めて一切合切5,000万円で決着をつけるという動きが実際にあったんだよね。私は裁判だといっても、患者さんはそっちの方に引きずられていくのよ。

しかし、引きずられていく中で、昭和電工の専務がNHKのテレビに出演して、仮に国が結論を出して、〔加害者が〕昭和電工だという結論を出しても、当社は従わないと、自分は従わないと公言したんですね。それを、聞いていて、それ、来たぞと。これは毒まんじゅうだと。もしこのわずかな金を受け取ったら、その毒がみんな体に行き渡る、毒まんじゅうだ。といいながら、患者さんのもとに駆け寄ってまいりました。昭和42年、事件公表からやがて二年が経とうとしていた、その時に私は新潟県弁護士会に、党派を超えて新潟水俣病事件の代理人についてくれという声明をまわしまして、何人かの先生方が参加してくれて、3月21日に、現地にまた行きました。そして、何度言っても、オッケーとはならない。そして、21日のその日は、一家6人が新潟水俣病にかかった桑野忠吾さんのお宅で、忠英君という息子さんがベッドに縛りつけられながら狂い死んだ、そういった日だったのです。裏手に行ってみれば、〔水俣病に罹患して〕狂った猫が、新潟の杉の木でつくった仕切り、ふすまに頭でぶつかって行って割ったそうです。忠吾さんの話では、猫はぶつかって行って七輪でも何でも割ってしまうんだそうです。病気にかかった猫もそういう状態だった。一度引き揚げてきたけれど、今日はこの桑野忠吾さんのお宅の忠英君の命日だったんじゃないか。そして、引き返してきて、夕飯を食べてから花を買って、そして、忠吾さんのお宅に行って、忠英君の仏様にお参りさせてもらいました。そして、親父さんの桑野忠吾さんに、「この事件は裁判でないと決着つかんと思うがどう思うね」と聞いて、ところ、「わしもそう思う」と忠吾さんも言うんですよ。「よしきた。じゃあやるか」と。しかし、そこで考えなきゃいかん。仮に忠吾さん一人が裁判を出すと言ってもだめで、忠吾さんが言うには、「裁判に出すには本家の御許しがないといかん」と。じゃあ本家から来てもらおう。本家の桑野清三さん。清三さんももう亡くなった。皆亡くなって、本当に寂しいです。この桑野清三さんから来てもらう。忠吾さんが今こういう決意をしたんだが、本家としてどうだねと。オッケーだと言ってくれたんだよ。しかし、それでオーケーと済ますわけにもいかんのだね。新潟でもやはり、被災者の会

というのができて、患者さんがまとまっていました。被害者の会の会長の了解を得ないで、メンバーだけで勝手に裁判に出して、果たしてどうかと考えるわけです。よしきた。会長にも来てもらおう。夜中だったんですが、使いを出して近会長に来てもらった。近さん曰く、「わしもそう思う。忠吾さんが〔裁判を〕やるなら応援する」と。「ただし、自分が裁判を出すのは一番後だ」と。そうかもしれんね。田舎の者を全部まとめていくためには、長に立つ者は一番最後に動くという、そういうやり方もね、近喜代一さんは分かっていたんです。この方も亡くなりました。そして、よし、それならこれで決まったら、裁判に出す原告がようやく一人捕まったら。そして、ようやく当時この運動を任されていた新潟県民主体水俣病対策会議事務局長の小林懋さんに、「来る6月12日に裁判を提起するということで原告になる者を探してくれ」と指示しました。そして、〔昭和〕42年6月12日、事件公表から二年目を期して、新潟水俣病民事訴訟、昭和電工を被告とする裁判をようやく提起することができました。こんなことばかり話していても時間がないので、話をとばします。

## 7. 被告側証人・横浜国立大学北川徹三教授の「農薬説」を法廷で論破

〔新潟の地図を黒板に記しながら〕昨日ここに来るまで、飛行機に乗っていたんです。佐渡が地図の通りにきれいに見えました。ここに佐渡島がありますよ。下手な図で悪いんだけど。これが、信濃川、新潟市。

ここから約4キロ離れたところに阿賀野川が、阿賀野川から上流約65キロメートルのところに、昭和電工鹿瀬工場があって、そして、アセドアルデヒドを製造しておりました。事件が起きますと、厚生省を中心として、原因究明に関わる作業が発足しました。熊本水俣病の教訓があったことから、原因は比較的早くに分かってきました。そして、その原因は阿賀野川の河口から60数キロ下がったところにある、昭和電工鹿瀬工場にあるという方向にほぼ確定的になって参りました。その時に昭和電工は(…)、御用学者と敢えて言います、横浜国大の北川徹三〔教授〕。大体、過去の公害事件で加害企業の味方になって出てくる学者は、国立大学か、有名大学の教授なんです。まず100パーセントそうですよ。そうでなければ、もう活動できないような時代だった。このときに出てきたのが、北川徹三〔教授〕。かつて熊本の水俣病では東京工大の清浦雷作〔教授〕。彼がアミン説を出した。チッソのための論文まで書いた。必ずそういう学者が出てくる。新潟の場合には北川〔教授〕。

〔黒板に地図を記しながら、〕新潟の港は河口港。河口に港があって、そしてここには経営民間の倉庫があって、この倉庫に、当時水銀農薬が保管されていました。〔北川教授が〕頭を使うなら、もっといいところに使ってほしいよ。それがね、新潟地震の際、今も地震の際の現象として、流砂現象といって、地中から土と水が噴き出してしまうという、災害が起っています。〔北川教授によれば、〕新潟地震があった際には、農薬倉庫から流砂現象が起って、下から水が

噴き出して、保管していた水銀農薬が埋没したと。水の中に浸かったと。そして、浸かった後、この信濃川に津波が上がってきた。確かにたいした津波でなかったが、津波はあった。そして、津波が引けた時に、この倉庫の中にあった水銀農薬の中の水銀が日本海に流されて、これが、阿賀野川の河口に達するわけです。阿賀野川の河口に達すると、普通ならば川の水で更に日本海の方に押し出されるはずですよ。そこをまた小知恵のつく横国大の北川教授は、実はそういうこともあり得るんだと言うんですよ。それは何かというと、塩水楔といって、阿賀野川の川の流れがこうあると〔図を書きながら〕、塩水の方が川の水より比重が重たいでしょ。水の流れがなければ、あるいは緩ければ、こっから川の底に塩水が楔型に入っていくわけです。これを塩水楔と言う。太平洋側では、この潮の満ち引きが短く顕著に現れるから、こういう現象はほとんどないんですけど、日本海の川は、塩水楔が川の流れが緩い時には、おきます。私が調べたところによりますと、この河口から、何キロくらいだったか、20キロくらいあったか、分かっているんですけどね、だから川から水道水がくるんですよ。下から。上の方から取らないんですよ。しょっぱいの飲まされるから。

〔北川教授によれば、〕この日本海に流れ出した有機水銀は、阿賀野川の河口に来た途端に、右向け右といって川を遡るんです。自然の法則に反しますね。そして、遡ったメチル水銀を含む塩水は、阿賀野川の河口を汚染し、ここに生息するニゴイ、ウグイ、フナ、鯉（…）、そういう川魚を汚染し、そして汚染された魚を多量に食べた下流住民が新潟病に罹患するということだったんですね。

しかし、次から次へとこの農薬説を裏返す事実が出て参ります。患者さんの中には、長い髪の毛を持った婦人がおりました。髪は、どのくらいの速度で伸びるか。メチル水銀を含む髪、それが、新潟地震の起きた6月16日以前にできた髪の毛から多量の有機水銀が検出された。これは塩水楔説では説明できない。

私は、新潟大学〔医学部教授〕の椿〔忠雄〕先生のもとに何回も通いました。椿先生から見せていただいた新潟大学医学部のカルテ、水俣病の典型的な症状をしている、視野が竹筒で覗いたみたいに狭く、〔実演しながら〕視野狭窄になると点にしか見えないんだ。〔患者さんに〕あなた何やっているんだというのと、見えないもんだからこうやって〔頭を動かして〕、大好きな大相撲を見ることになる。我々には全部見えるんだけど、視野狭窄は点のようにしか見ない。〔患者さんは〕こうやって見るんだよ、首動かして。そんなことがあったんですね。

昭和電工と北川徹三先生は、原因が昭和電工と絞られていくにしたがって、国会だとか、国会の委員会とか、様々なところに写真を持って行って、この写真が、この新潟西港から〔図を書きながら〕、白い影が出ていると。そして、ここで撮った写真とつなぎ合わせるんですよ。白い影が、阿賀野川の下流流域まであった。これは新潟地震の時に、ここに、昭和石油という製油所があって、黒い炎をあげて何日も何日も燃え続けた。そして、このタンクから石油が流れ出て、潮

の流れに沿って流れていった、そしてそれが空から見て、夕日によって光って白く見える。北川徹三氏が、この白いものがメチル水銀だと言うんです。そんなことがあるかと、メチル水銀が空から見て白く見えるなんてことはそれ以外に聞いたことはありません。そして、証拠としてその写真を出してくるわけです。

見ました。そこには日付が書いてある。6月27日だったかな。北川さんが出してきた証拠には写真があって、その写真には白いものが繋がっているけれども、翌月、防衛庁が、地震の後の被害状況と撮るための航空写真があったんですね。何よりもはっきりしている、これが塩水楔だと、北川先生は主尋問で答えた。この年は、阿賀野川の新潟の方は集中豪雨があって、雪解け水が多かった。塩水楔の方が阿賀野川を遡上するのは、8月上旬になってからだと言言したんですよ。分かるでしょう、この矛盾が。優秀な国立大学の先生ですよ。そうかと言って信用しちゃあかんね。信用できると思う人でも、よう言うこと聞いて、疑問があったらぶつけてみてください。

こうして〔北川証人に対して〕「あなたが示したこの写真の裏を見てください。あなたが言った塩水楔が、阿賀野川を遡上した日付の前じゃないですか。」一もうこれで〔北川教授の〕答えなし。この裁判の勝利を、その場で私は確信致しました。

## 8. 新潟水俣病第一次訴訟判決の意義とその後の直接交渉

裁判の細かい結果は別にして、訴えの提起はどうだったかとかいうことなんかは、レジュメを読んで頂くことにして（…）。〔講義終了時間が迫ったことを菅原が示すと〕時間でしょ。緊張するんですよ、こういう人がいると〔教室に笑い声〕。

結論から言うと、新潟地裁の判決文。ひとつは、昭和電工の責任を認めたということです。明治の足尾鉾毒事件以来、日本の公害被害者は、敗北の歴史を重ねてきた。その中で、初めて、被害者が戦って勝利を得たということは、公害被害者敗北の歴史にピリオドを打ったんです。私は、裁判所で、判決要旨書というものを配られ、それを小脇に抱えて、裁判所に駆け付けた皆さんに対して、私たちはこの裁判の初期の目的を達したと、挨拶いたしました。

それから、次は、因果関係。今までは公害被害者がなぜそうなったのかということを、立証しなければならなかったんだけれども、新潟地裁の宮崎啓一裁判長は、被害者は加害企業の内部までいろいろなことを分かっているとは言い難い、従って、被害者が裁判で訴えられた場合には、問題の工場の門前までのルートを証明すれば、その工場が加害者ではないということを反証的に掲げ、因果関係を認めてOKという、そういう判決でした。

三点目は、化学工場たるものは、レジュメに書いたように、最高技術をもってしても、毒の排出を停止できない場合には、操業を一時停止してまでも、近隣住民の健康・生命を守らなければならない。人命尊重の考え方を、初めて公害裁判の中に明確にしていたのです。

そして、翌日、昭和電工は、判決の前に「いかなる判決だろうと、当社は新潟地裁の判決に従



います」という声明を出しました。そして、私たち原告は、それに応じて、控訴しないで判決を確定し、翌日、判決が命じた2億5,000万円を保管しようと、徳川家の菩提寺、浜松町にある大きなお寺、増上寺の本堂で、富士銀行が持ってきたお金の箱、ジュラルミンの箱を私が確認して、授受、管理をさせました。そしてその後2年間昭和電工と直接交渉をやって、判決が半分に減らした補償額を、交渉の結果、満額引き出して、それだけではなくて、被害者に対しては、毎年年金を支払うという、判決では獲得できない、そういう協定書を結ぶことができました。

## 9. 新潟水俣病第二次訴訟弁護団長辞任以降 ―新潟県水俣病地域福祉推進条例の制定―

その後、第二次訴訟の弁護団長を務めておった私の、団長辞任という苦しい時を経て、やがて、最高裁判所は、和解の前提となった水俣病の認定基準は間違いであると判断を下すんです。

それと、新潟では新しい知事、泉田知事が誕生しました。泉田さんは、私たちが今、豊かな生活を送ることができたのは、患者さん方の犠牲の上に立ってこそ、ということをおっしゃっていた。既に遅いけれども、県民として、患者さんたちに何とか報いたい、その方法はないかと、何とか手法は無いものかと。そこで、私を中心とした水俣病懇談会というものができて、そして、新潟水俣病患者支援の条例をつくりました。その条例というのは、それまでの患者であるかどうかの認定は政府が決めた認定審査会によらなければならなかったが、認定審査会は設置しません。そして、患者さん達を見てきて、水俣病の診断に経験があるお医者さんが、この人が患者であるということを診断すれば、新潟県はそのまま認めますと。こんなことは初めてだよ。だからその基準が全然違う。

国の基準はまだ残っている。最高裁判所が、これは間違いだといってもね。何でね、環境省それに従わないの。三権分立とは一体何なのか、司法、行政、立法〔の分立〕。司法がNOと言った時には、行政はそれに従わなくちゃいかん。相変わらず患者切り捨ての認定基準に固執しているのが今の環境省で、その進展はありません。

様々なことを通して、一步一步、私たちは前進していると思います。

## 10. 最後に ―名古屋市立大学の皆さんに贈る言葉―

なぜ私は今も水俣に関わっているのか。〔昭和〕43年の1月、初めて私が水俣を訪ねた時、胎児性子どもたちが収容されている市立のリハビリセンター病院で、一部屋に何人もの胎児性子どもたちが、立つことも、動くことも、しゃべることも、歌うことも、本を読むこともできずに、ヨダレをたらして、寝そべったまま、あるいはあぐらをかいて、ただ、オーオーと叫ぶだけの光景を見て、私は怒りに震えました。その中の一人の男の子が、立ちあがって松葉づえをついて立ちあがった姿をみて、私は怒りに震えると同時に、人間の生命力の強さに感動いたしました。その時の思いが今日まで弱ることなく持続しております。私が怒るときは、その子どもたちが常

に私のバックにいるということが分かっています。二人の私がいます。一人は敵の前で闘う坂東、もう一人の坂東は冷静に闘っている私をながめて、私を激励する。もうひとりの坂東がいるんです。他の人たちが水俣から離れても、そしてまだ問題が終わらないんですから。

名古屋市立大学の皆さんに、最後に言葉を贈ります。

「現場こそ最良の教師なり。世に出て宝物を探せ。宝物は見つかるかもしれないし、見つからないかもしれない。見つからなくともいいじゃないか。諸君は宝物以上のものを得るであろう。現場に行って感性を磨け。そしてポリシーを構築せよ。その道のプロになれ。Good luck !」  
〔拍手〕。